「9年間の連続した『学び』の確立を目指して」

～仲間づくり・自治力育成等を通して～

山鹿市立
鹿北小学校教諭
建岡　朋治

山鹿市立
鹿北中学校教諭
西浦　伸一

１　はじめに

鹿北小学校　　鹿北中学校

熊本県の最北端にある山鹿市。その山鹿市の中でも一番北にあり、福岡県との県境に位置する鹿北町に鹿北小学校と鹿北中学校はある。

小学校も、中学校も、児童生徒とかかわりながら、精一杯、指導に取り組んできたが、様々な課題が残っている。そんな状況をきちんと認めあえる関係づくり、より良好な関係を築くことが児童生徒の健やかな成長につながることを再認識しながら教育活動に取り組んでいる。中学校区の課題は、小中であらわれ方の違いはあっても、根っこは同じだということ、つまり、義務教育９年間で育てていく視点こそが今求められている。鹿北の子どもたちの「自立」や「生きる力の育成」には、この視点が不可欠であるという思いで、鹿北小・中学校は実践を重ねてきた。

２　児童数・学級数

児童生徒数　　鹿北小学校児童数１２７名、鹿北中生徒数７２名
学級数　　鹿北小　通常６、特別支援２（知的１、自閉症・情緒１）
　　鹿北中　通常３　特別支援３（知的１、自閉症・情緒１、難聴１）

小学校も中学校も全学年単学級である。小さい頃から一緒に生活してきていて男女分け隔てなく仲が良い。しかし、自分の思いを伝えたり、相手の思いを推し量ることが苦手な児童生徒が多い。人間関係が固定しており、多面的な人間関係づくりを進めていく必要を感じる。

３　鹿北の教育課題

（１）なかまづくり・集団づくり

自分の思いを他者に伝えたり、他者の思いを推し量る力をつけるための取組を行う。友だちのことを知っているようで知らない。学級や部活動集団でのなかまづくりをどのように進めていくのかが課題である。小学１年生から中学３年生までクラス替えがないことはプラスにもマイナスにもなる。

（２）社会性の育成・一人でも勝負できる自立した人材の育成

集団でいるときには、挨拶や返事、受け答えができるが、一人になるとできない児童生徒が出てくる。社会的自立のためにも社会性を身につけ、１対１で勝負できる人材を育てていく。自尊感情や自己肯定感が低い児童生徒が多い。また、何かにチャレンジす

る強さや勇気に欠ける面がある。最後までチャレンジさせ自信を持たせたい。

（３）学力面での個人差・個別支援が必要な生徒の増加

学習面や集団生活において、個別支援が必要な児童生徒が年々増加している。個別の学習支援やコミュニケーションスキル育成など、計画的な取組を考えていきたい。

（４）体力低下

スクールバスで登下校する児童生徒、自転車通学の中学生が多い。また、鹿北小学校は今年度から運動部活動が社会体育へ移行した。今後、移行による影響として体力低下が心配される。

４　鹿北の「強み」

（１）連続した学びを可能にする教育環境

まほろば保育園、鹿北小学校、鹿北中学校が併設された環境にあり、１５年間の連続した学びが可能である。

（２）少人数教育

児童生徒数が少ないため、一人ひとりの生徒と向き合う時間が多く確保できること。また、教室や施設に余裕があり、それらの活用において工夫できる。

（３）地域とともにある学校づくり

地域コミュニティーが存在し、地域や家庭の協力が得られやすい。さらに伝統文化・芸能（太鼓、神楽、茶山唄）や伝統産業（木材、茶、シルク）等を通して地域との双方向の交流ができる。

５　鹿北の教育の方向性・・・縦（保小中）と横（地域）の連携による教育の充実

（１）「小中一貫教育」及び「地域学校協働活動」の充実

連携を通して、少人数の人間関係から抜け出し、年齢、男女を問わず様々な生き方や考え方をもった人たちとの交流による「多様な学び」を創造していく。社会との接点での学びを充実させることで、社会性の育成を図っていく。その中核となるのが、「小中一貫教育」及び「地域学校協働活動」の充実である。

（２）地域とともにある学校づくり

昨年度より、小中合同学校運営協議会を組織し、小中学校ともにコミュニティスクールとなった。地域の方々による学校教育への参画推進、さらに、鹿北委員会（児童会）・生徒会による地域行事への主体的参加、部活動生を中心とした地域交流、貢献活動に力を入れていきたい。これらの活動の一層の推進を図ることで、「地域とともにある学校」づくりを進めていきたい。

６　具体的実践Ⅰ（平成２８年度）

（１）校種間連携研究推進

校種間連携についての実践を進めるにあたって、目的（意義）・方向性・研究組織について小中学校の教職員で共通理解を図った。その際、一番重視したことは、従来の６・３制にとらわれることなく、「９年間の連続した学び」という意識を持つことである。小中学校をつなぐとともに、研究のコーディネーターとして作守順子先生にも研究に参加していただいている。

（２）めざす姿・方向性を一致させることで課題を共有

実践を進める第一歩として、小中学校の教職員全員で、鹿北の教育のめざす方向性を合わせることに取りくんだ。そして、９年間でどんな児童生徒を育てていくのかを共有するために、「めざす子ども像」（別紙資料１）を作成した。さらに、「めざす子ども像」と現状とのギャップを把握するために、めざす子ども像アンケートを作成し、毎学期実施している。このアンケート結果を考察することで具体的な課題を明らかにし、実践に結びつけている。

（３）校種間連携（小中連携）を進めるために重視した「そろえる」ということ

校種間連携の実践化のために、「鹿北版学習過程スタンダード」、「鹿北版ＵＤ化チェックリスト」、「鹿北中校区保小中連携カリキュラム」、「学びの姿」の作成に取り組んだ。校種間連携研究の１年目は、行事等の連携を行うとともに、小中学校で様々なことをそろえていく作業に多くの時間を費やした。いわゆるベクトルを合わせることを重視した。同じ方向（目標）を見つめることが実践を推進していく上では不可欠であると考えている。

①　学習過程スタンダード

鹿北小中学校のすべての授業の進め方を統一するために作成した基本的な学習過程の形である。これを活用、実践することで、子どもたちは授業の見通しを持つことができ、より一層授業に集中できると考えている。ＵＤの授業力向上のための方策であり、インクルーシブ教育システム構築の重要な柱となる実践である。

②　鹿北版ＵＤ化チェックリスト

自分の授業や言葉がけ、態度などを振り返るための基準となるものである。自分ではなかなか気づかない自分の課題を見つめることに役立っている。毎月チェックリストに記入し、自分自身の状況とともに、学校全体の傾向を把握し、授業改善や生徒指導、個別支援に生かしている。

③　鹿北中校区保小中連携カリキュラム（別紙資料２）

３つの保育園が廃園となり、まほろば保育園が新たに開園することに伴い、保小中１５年間の子どもの発達段階に合った身につけたい力を表にしたものである。保小中の教職員、保護者、地域の方々と１５年間の学びの連続性を共有できるという点で様々な場面で活用していきたい。鹿北町の全戸に配布する予定である。

④　学びの姿

小中学生が、授業において「意欲を持って、伝え合い、深め合う」ことができるようにするための基本となる授業中の姿である。

学びの姿

意欲を持って

- 気持ちと用具の準備
- 心を込めたあいさつ、返事
- 正しい姿勢

伝え合い

- 意見や思いを、話す、聞く、書く

深め合う

- 考え、探求し、解決する

（４）地域との連携・交流・貢献

鹿北小中合同学校運営協議会を設置し定期的に協議の場を設けている。今年度で２年目となる。

小中学生が率先して地域行事に参加し、地域活性化を推進する。ナイトハイク、かほくまつり、町の駅伝大会などのポスターや旗を作成し主体的に行事にかかわる意識と行動力を高めている。

中学校の吹奏楽部は、土日を利用し、鹿北の福祉施設やサロン会に出向き、演奏活動や交流活動を行っている。中学生が行くと地域の方々は涙を流して喜んで下さる。自分たちの活動が地域の方々の役に立っていることを肌で感じ、自己有用感や自尊感

情の涵養に結びついている。

７　具体的実践Ⅱ（平成２８年度～２９年度）　※６つの重点実践項目の推進

（１）　地域連携

①　目的

地域との連携・交流を通して、より多くの方々の考え方や思い、生き方、生活に触れることで、視野を広げ、地域や自分の将来を見つめる機会を増やすことができる。また、地域貢献活動により地域を元気に笑顔にすることで、自己有用感や自尊感情の涵養を図ることができる。

②　具体的実践

ア　地域学校協働活動推進

今年度、地域学校協働活動推進員を選任し、学校と地域を結ぶ役割を担っていただいている。学校からは、総合的な学習の時間の講師依頼、福祉施設での交流活動などを、地域からは、吹奏楽部の演奏活動や地域行事のボランティアの依頼などがきている。

吹奏楽部、地域での演奏＆交流

イ　地域行事への主体的参画

鹿北町の行事として、ナイトハイク、茶山唄全国大会、かほくまつり、駅伝大会などがある。これらの行事に小中学生が積極的に関わっている。最近では、小単位の地区からも小中学生との交流を求める声が出てきている。

今年度から、中学生は「かほくまつりサポーター」として企画段階から地域行事に参加させていただいている。

かほくまつりマラソン大会出場

③　成果と課題

地域との交流、社会の接点での学びを充実させることで、初めは会話が続かなかった児童生徒が積極的に会話をするようになり、コミュニケーションスキル向上に結びついている。福祉施設や地域のサロン会での交流を通して、高齢者や地域の方々の喜ぶ姿に接し、自分たちの行動の意味や大きさに気づき始めている。

（２）小中連携

①　目的

鹿北の強みの一つは、小学校と中学校が併設された位置にあることである。様々な形での連携を行うことが可能である。今年度は「連携から一貫へ」という大きな流れをつくり、子どもたちの学びをさらに充実させていきたい。

小学校高学年の教科指導に多様な教職員が当たることにより、興味・関心や個性伸長への対応，教科指導における専門性の強化を図ることができる。

学校段階を超えた学年段階の区切りを柔軟に設けた上で，区切りごとに重点を定め指導体制を整えることで、中学校段階へのなめらかな接続を図ることができる。

② 具体的実践

ア 乗り入れ指導の拡大

昨年度、中学校教員が小学６年生の音楽の乗り入れ指導を行い、今年度は、小学５年生の音楽、小学６年生の社会、保健体育、外国語活動の指導を行っている。乗り入れ指導を円滑に行うために、今年度より小中学校の日課表を統一した。

中学校教員が小６社会科の授業へ

イ 連携強化

小中合同の取組として梅ちぎり、交流給食などがあり、また、長期休業期間には中学生が小学生の学習支援を行ったり、運動会ではボランティア活動などを行っている。教職員の交流として小中合同の校内研修会や授業研究会を定期的に実施している。現在、小中学校の教務主任が６・３制から４・３・２区分による教育課程の編成に取り組んでいる。

交流給食（ランチルームにて）

③ 成果と課題

乗り入れ指導の拡大は、小学校高学年の学級担任制から一部教科担任制への移行を目的としている。複数の教師が児童や学級の状況把握を行うことにより、課題の早期発見、早期対応が組織的に行えるようになった。また、交流を重ねることで小中学校お互いの文化の理解が進んでいる。

（３） 学力向上

① 目的

学習スタイルを小中学校で統一することで、児童生徒が見通しをもって授業に参加することができ、集中力の高まりも期待できる。また、学習スタイルを統一することは生徒の学力向上と教師の指導力向上につながると考える。鹿北版 UD 化チェックリストを活用することで、自らの授業を振り返り、課題の把握や改善に向けての実践を具体化できる。そのことが合理的配慮の充実とユニバーサルデザインの授業力向上につながると考えている。

② 具体的実践

ア 鹿北版学習過程ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞの実践

昨年度より、小中学校で授業における学習過程を統一し、どの授業でも「めあての提示」→「課題設定」→「自分で考える」→「グループ、集団で考える」→「まとめ」→「振り返り」の流れで授業を行っている。授業の初めに、黒板に上記の授業の流れをすべて掲示するこ

中学２年生の社会科、提案授業

とで、今すべきこと、次にすべきことなど、１時間の授業の過程を生徒、教師で共有し授業を行っている。本年５月には、鹿北版学習過程スタンダードの提案授業を中学２年社会科で実施した。小学５・６年生、中学生全員、保護者、地域の方々、小中教職員で参観し、共通理解を図った。定期的に小中合同授業研究会を行い、学力向上、授業力向上に向けて実践を深めている。

イ　鹿北版ＵＤ化チェックリストの活用（別紙資料３）

特別支援部で作成したチェックリストを使い、毎月、自分の授業をチェックしている。その中で特に評価が高い項目については、実践記録として残し、全員で共有し活用できるようにしている。また、評価が低い項目については、重点的に授業改善に取り組んでいる。

ウ　「学びの姿」の徹底

学びの姿説明（小５～中１）

小中学校で、授業に参加する上で、特に大切にしていくことを「学びの姿」として作成し、児童生徒への説明を行い、定着できるよう取り組んでいる。説明は、小学１年生から４年生までは小学校の多目的スペースで、小学５年生から中学１年生までは中学校ランチルームにて、中学２・３年生は中学校体育館にて、発達段階に応じて行った。現在定着に向けて小中学校全学年全教科で取り組んでいる。

③　成果と課題

学習過程スタンダードの実践を徹底するまでに時間がかかった。自分のスタイルを持っている教師にとってスタイルを変更することに戸惑いがあった。しかし、徹底することで見えてきたこともある。特に中学校では、まとめや振り返りの時間の確保を意識することで説明を簡潔にしたり、板書の工夫などに変化がでてきた。しかし、児童生徒にとっての効果については長期的に変容を見ていく必要がある。

鹿北版ＵＤ化チェックリストの活用は、客観的に授業を振り返り、授業での視点の明確化において活用が定着してきている。教師の意識の変化を実感として感じることができる点は成果と言える。

（４）　自治力育成となかまづくり

①　目的

鹿北小・中学校が目指すこども像の一つに、「自ら課題を見つけ、話し合い、解決に向けて自主的に行動できる児童生徒」というのがある。そのためのなかまづくり、集団の質の向上に向けて、小学１年生から中学３年生までの縦割り班を編成した。縦割り班活動を通して、より多様な人間関係の中での活動、小中の班長を中心とした計画立案と実践、課題解決場面などを意図的に設定することで自治力育成を図る。

②　具体的実践

ア　縦割り班活動

縦割り班結成式

小学１年生から中学３年生まで１１の縦割り班を編制し、小中の児童生徒からそれぞれ班長を決定した。５月に縦割り班結成式を行い、定期的

に交流タイムを設定している。交流タイムの内容は事前に班長会を開き、小中の班長が話し合って決めている。交流タイム後は班ごとに反省会を、その後、小中の班長のみでの反省会を行っている。１２月には、保育園の園児も含めての縦割り班による、保小中なかよし駅伝大会が計画されている。

イ　リーダー研修

夏季休業中に、小学校の鹿北委員会（児童会）と中学校の生徒会との合同委員会を行い、２学期以降の活動計画を作成していく。中学校では毎年３月に１泊２日のリーダー研修会を行っている。今後小中合同での研修会を行っていきたいと考えている。

生徒会リーダー研修会

③　成果と課題

縦割り班活動は固定した狭い人間関係を広げられる点や小中のリーダー育成という観点からも効果的な活動である。活動を通して、中学生にとっては、小学校低学年の世話をすることなどで有用感を感じ、小学生にとっては身近なところに近い将来の目指す姿を具体的に見ることができる。また、計画立案や反省の場面を設定することは、話し合いや実践力等様々なスキルアップの機会となっている。今後は交流の内容をさらに精選することや、一過性の交流にならないように工夫していきたい。

（５）　体力向上

①　目的

体力向上において目指す姿は「自分の体力や健康に関心を持ち、積極的に運動に親しむことができる児童生徒」である。鹿北小学校では、今年度から運動部活動が社会体育へと移行した。そのため、小学生の体力低下を防ぐ手だとして、中学校の部活動への参加を考えている。また、継続して運動と親しむ工夫を行っていくことで、体力向上、健康増進に取り組める児童生徒の育成を図る。

②　具体的実践

ア　小中合同体力トレーニング

中学校の部活動では、初めの２０分間、全部活動一斉のトレーニングを行っている。そのトレーニングに小学４年生から６年生の児童が参加し小中合同トレーニングを計画している。１０月上旬より実施予定である。毎週定期的にトレーニングを行うことで体力の維持・向上に努めていく。

イ　鹿北ギネス・鹿北カップ・克己タイム

鹿北ギネスは体育委員会が種目を考案し実施している取組である。「ピカレース」（廊下の雑巾がけ）、「怪力野郎」（直径２ｍの円の中から　砂袋を投げ距離を計測する）など、誰もが参加し楽しみながら記録の更新を目指せるような種目を取り入れている。

鹿北カップは、昼休みの時間を利用し、１年間で計４回行われるスポーツ大会である。

鹿北ギネス（ピカレース）

種目については体育委員会で検討した「バスケットボール」「サッカー」「ハンドボール」などで、縦割り班を利用しチームを作りトーナメント方式で試合を実施している。生徒全員が参加し昼休み楽しく活動している

克己タイムは、長期休業中を利用し部活動とは別に体力向上トレーニングに全生徒が参加し実施している。トレーニングの内容は、スポーツテストを意識したものとしており、「ハンドボール投」「タイヤ押し」「坂登り」などである。

ウ　地域と連携した野球・ハンドボール活動

鹿北地域の社会体育で実施している少年野球とハンドボール、中学校の部活動で実施している野球部とハンドボール部の交流と連携を強化し目的を共有しながら活動をしている。小中連携、地域連携のもとスポーツを通して児童生徒の育成に取り組んでいる。定期的に交流活動や合同練習を行い、ハンドボールでは、城北高校女子ハンドボール部を招いてのハンドボール教室を開催している。

ハンドボール教室

エ　メディアコントロール

小中合同で毎月メディアコントロール週間を設けている。中学校のすこやか環境委員会が小学校の正門でのぼり旗を持って啓発を行っている。家庭での生活設計力向上への意識を高める取組として効果を期待している。

③　成果と課題

鹿北ギネス、鹿北カップ、克己タイムについては取組が定着してきており、生徒が自主的に計画し実施している。鹿北カップでは、縦割り班を活用することで、班長を中心としたまとまりがでてきている。野球とハンドボールの取組は、ようやく軌道に乗り始めたところである。ハンドボールにおける小中連携、地域連携は進んでおり、スポーツを通しての人間形成や耐性強化に計画的に取り組んでいる。小中合同トレーニングは１０月からであるが、継続して取り組むことで、中学入学時の小中の体力や運動量のギャップを最小限にしたいと考えている。中学校では、計画的な体力向上を進めてきた結果、２６年度から３年年連続で「県体力向上優秀実践校」との評価を得ている。

（６）　支援教育

①　目的

鹿北小・中学校では、支援が必要な生徒が年々増えており、支援学級在籍児童生徒の増加とともに、通常学級においても支援が必要な生徒が増えている。合理的配慮の提供など個別支援の充実を図り、インクルーシブ教育システム構築に取り組むことは、すべての児童生徒にとって達成感ある学びを提供することにつながり、さらには鹿北が目指す「社会的に自立した人材の育成」に近づいていくものと考える。

②　具体的実践

ア　すまいる連絡会

鹿北子育て支援センター主催で、毎月第１金曜日にすまいる連絡会を開催している。参加者は、まほろば保育園長、主任児童員、保健師、小・中学校職員、小中連

携コーディネーターなどである。保小中にわたって兄弟姉妹がいる場合の家庭支援の協力体制づくりや子どもたちの家庭環境や育ちの情報交換を行っている。

イ　鹿北版ＵＤ化チェックリスト作成・活用（別紙資料４）

熊本県及び各都道府県のチェックリストを参考に、鹿北版ＵＤ化チェックリストを作成し活用している。毎月全職員がチェックリストへの記入し、コーディネーターが集計し、鹿北のＵＤ化の状況を把握し、課題を明確にしている。

ウ　移行支援シートの作成

必要に応じて、移行支援シートを作成している。このシートの第１歩は保育園からであり、保護者の同意を得て作成している。移行支援シートを作成して終わるのではなく、合理的配慮が次の段階に適切に移行されていくように、計画的に移行支援会議を開催している。

エ　鹿北版こどもシートの活用

応用行動分析を支援に生かし、行動の意味を考えるために鹿北版こどもシートを使ったケース会議を行っている。このシートを使用することで、生徒への対応方法や有効な手立てなどを全職員で共有し実践化している。うまくいった事例、いかなかった事例など実践後についても話し合る体制をつくっている。

オ　サポート教室の設置

今年度から中学校にサポート教室を設置し、サポートティーチャーを中心にコミュニケーションや集団生活に課題があったり、学習支援が必要な生徒への個別の対応ができる体制を整えた。現在、３年生の英語の個別学習や２年生の生活支援などで活用する生徒がいる。

中学生による小学校の学習支援

③　成果と課題

すまいる連絡会により、支援や配慮が必要な子どもや家庭について共有することで、早い段階からの関わりが可能となった。そして、移行支援シートを作成することで、合理的配慮や個別支援や個別指導をそのまま引き継ぐことができ、継続的な関わりという点で効果が出ている。

鹿北版ＵＤ化チェックリストを活用することで、生徒への関わり方や言葉がけなど、個々の生徒の状況に応じて行うなど教職員の意識や行動に変化が出てきている。

鹿北版子どもシートは、全職員で事例検討ができることや、共通理解と共通実践が同時にできること、役割分担を決めやすいことなどから、すぐに実践に生かすことができるという利点がある。しかし、それでも、個別支援が追いつかない現状があることや、対応が個々の児童生徒によって違うため、関係機関との連携強化や教職員のスキルアップの必要性を感じている。

８　成果と課題

小中連携の取組を始めた当初は、お互いの文化の違いに戸惑い、小中交流程度にとどまっていた。昨年度より、国の指定を受けたこともあり本格的に連携から一貫までを視野に入れた研究実践に取り組めるようになった。現在、小・中学校が同じ方向に向かって歩み始めている。目指す児童・生徒像の共有化を図ったことは、様々なことをそろえることの

基盤となっている。一方では、児童生徒の発達段階を踏まえた段階的な取組も行っている。９年間という期間で教育を考え、子どもたちを育てていくという意識が広がりつつある。

小学校では、中学生としての自我の目覚め、反抗期、学力差の拡大等を見据えた時、自尊感情の涵養、学習意欲の喚起、学校や教職員と生徒、保護者との信頼関係の構築が不可欠であることを理解し、それらを踏まえた上での教育実践を行うようになった。また、中学校では、小学校での授業や様々な指導の継続性、連続性を継承していくこと、小学校６年間で身につけた学びの姿、リーダー性、多方面にわたるスキルなどのレベルを低下させることなく引き継ぐことを意識するようになった。このことは大きな成果と言える。

児童生徒の交流が増えたことで、中学生が小学生のために貢献したり、小学生が中学生に対して、近い将来の自分のモデルとしてあこがれをもつことなど、お互いが認められる取組や小さな成功体験を積むことで、自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる場面が増えてきた。

学力面や個別支援の効果や変容などは、全体のアンケート調査では見えにくい面がある。また、学力や体力では、長期間の推移による変容、意識の変化を見ていく必要がある。その点では、まだまだ、実践の積み重ねを行わなければならない。さらに、個々の生徒の変容なども今後見ていくことが大切となってくる。

６・３制にこだわらず、４・３・２制あるいは５・４制など、鹿北の現状を踏まえた上で教育課程を編成していくこと、そして、保育園が小中学校の近くに開園したことで、保小中１５年間の鹿北の連続した学びをどのように創っていくのかが今後の課題である。

児童生徒数減少による固定した人間関係からの脱却を考えた時、学校の中だけで教育活動を完結させるのではなく、広く地域の方々との連携を深めながら「社会の接点での学び」の創造が大切となってくる。現在、中学校では総合的な学習の時間の大幅な見直しを行っている。中学３年生のテーマを「地域貢献」とし、より地域の方々との交流や地域資源活用による学びを考えていくこととなる。

最後に、小中の連携・交流や一貫教育に向けての取組は、子どもたちの自立や生きる力育成のための方策としてとらえている。９年間の学びの連続性で、目指す児童像・生徒像に一人ひとりが近づくことができたのかどうかが何より大切である。すべては、そのための手段である。そのことを常に意識して今後も実践を深めていきたい。

TKU「英太郎のかたらんね」鹿北中から生中継「しあわせ運べるように」歌と手話で披露